

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名 貞松 成

学位の種類 博士（教育学）

学位記番号 第甲29 号

学位授与の要件 大阪総合保育大学学位規程第13条

学位授与の日付 令和5年3月19日

学位論文題目 保育の個別最適化研究 ―子どもの発達の個人差と興味・関心の個別性に対する関わり―

論文審査委員 主査 大方美香（大阪総合保育大学教授・博士（教育学））

副査 小椋たみ子（大阪総合保育大学教授・博士（文学））

副査 中坪史典（広島大学教授・博士（教育学））

〔1〕 論文の概要

「個別最適」は、2020 年に初めて公示された文言であるが、その内容は子どもの育ちと内面を理解することであり、日本の保育において以前から大切にされてきた概念でもある。しかし、子どもの育ちをどのように把握し、子どもの内面をどのように理解しているかについては、これまで明らかにされてこなかった。特に、保育所保育は集団で行われることを前提としていることから、子どもの育ち、すなわち発達の個人差に対しての配慮が求められる。また、子どもの内面は、主には子どもの興味・関心を指す。子どもの興味・関心は、文字通り子どもの内側にあり目に見えないものであるため、保育者によって子どもの興味・関心の理解は異なって当然である。そこで、本研究では、保育者がどのように子どもの発達の個人差を把握し、子どもの興味・関心を理解しているのかについて、3 歳児の砂遊びに焦点を当てて実証を重ねた。

本研究の章構成は以下の通りである。

序 章 本研究の視座と課題

第1章 子どもの活動と保育経験年数の関係

第2章 子どもの活動を促す保育者の着眼点

第3章 子どもの興味・関心の判断基準

第4章 子ども理解に必要な着目点

第5章 子どもの発達の個人差への配慮

第6章 子どもの興味・関心の個別性に対する保育者の関わり

第7章 子ども理解に必要な保育者の経験

終章 保育の個別最適化研究の総括

序章「本研究の視座と課題」では、本研究の背景と目的を整理した上で、類似する先行研究を紹介して、本論文の視座について説明した。

第1章「子どもの活動と保育経験年数の関係」では、保育者の経験年数によって保育者の行動と子どもの遊びがどのように異なるのかを示した。保育者の経験年数を子ども理解の重要な要素の1つと位置付け、経験年数の異なる保育者20人の協力のもと、経験年数による保育者と子どもの活動内容の違いを明らかにすることで保育経験年数が子ども理解に与える影響を示した。保育者が子どもと一緒に遊ぶ回数と遊ぶ時間、砂場での移動回数と移動時間については、経験年数による違いはなかった。しかし、子どもの活動内容は保育者の経験年数によって複雑になり、活動時間が長くなるなどの違いがあった。経験年数の多い保育者は新人保育者と同じような行動をとっているように見えるものの、子どもの興味・関心に沿った活動を展開していることを実証した。

第2章「子どもの活動を促す保育者の着眼点」では、経験年数の異なる保育者20人に眼鏡型の視線計測器を装着してもらい、経験年数による保育者の視線の違いについて明らかにした。砂場遊びにおいては、中堅保育者は新人保育者よりも注視時間が短く、特に、子どもの身体と砂場の外を注視する時間が有意に短い結果となった。また、中堅保育者は新人保育者よりも注視回数が多く、特に、子どもの身体と砂場の道具を見る回数が多いことも明らかとなった。保育者は、経験を重ねることで短い時間で素早く状況を判断することができるようになり、その結果、子どもを観察する回数が多くなり、複数の子どもを効果的に把握することができることが示唆された。

第3章「子どもの興味・関心の判断基準」では、経験年数の異なる保育者20人に、9人の3歳児の砂遊びの動画を視聴してもらい、それぞれの子どもの興味・関心について記述してもらった。新人保育者は、子どもが誰かと一緒に活動する姿である共同性をもって子どもの興味・関心を判断していたのに対し、中堅保育者は子どもが目的を持って行動しようとする志向性をもって判断していた。保育者は経験を重ねることで、子どもの活動の前後を読み取るようになり、子どもの内面の理解に活かしていることを示した。

第4章「子ども理解に必要な着目点」では、経験年数の異なる保育者20人に自身の砂遊びの活動を撮影した動画を視聴して省察してもらい、経験年数による保育者の省察の違いを検討した。その結果、経験年数による省察内容の違いは認められなかったものの、保育者は自身の保育を反省した後に子どもの姿に着目しており、省察内容は経験ではなく回数によって異なることが明らかとなった。保育実践の振り返りは、保育の質の向上には欠かせないとされているものの、保育者が子ども理解に取り組むためには2回の省察が必要であることが示唆された。

第5章「子どもの発達の個人差への配慮」では、保育所で記録されている発達記録を数

値化することで、子どもの発達の個人差を可視化した。保育者による子どもの発達の個人差をクラス単位で示した結果、保育者はクラスの平均的な発達から半年以上の遅れのある子どもを集団に入ることが難しい子どもと認識していることが明らかとなった。他にも発達障害傾向のある子どもや、問題行動をとる子どもに対しても同様の認識をしていた。保育者による子どもの発達の個人差の把握を可視化して集団に入ることが難しい範囲を示した。

第6章「子どもの興味・関心の個別性に対する保育者の関わり」では、保育者20人に砂遊びに取り組む9人の子どもたちを観察してもらい、子どもたちがそれぞれ何に興味・関心を持っているかについて記述してもらった。砂遊びに取り組む子どもの興味・関心は、素材、道具、人物の3つに分類され、統計的に有意に異なっていた。同じ活動に取り組む子どもたちの興味・関心の個別性と、その個別性に対する保育者の関わりについて示した。たとえ同じ子どもの姿を見たとしても、保育者によって子どもの興味・関心の所在は異なっていたことから、1人の保育者によって子ども理解を深めることは困難であることが示唆された。こうした背景は保育カンファレンスを通じた保育者同士の情報共有と意見交換が必須であることを示している。

第7章「子ども理解に必要な保育者の経験」では、10年の保育経験を持つ保育者への聞き取り調査を通して共通経験を明らかにした。その結果、保育者の最初の10年間には、模倣期、工夫期、確立期、協働期の4つの成長期があり、成長期と成長期の間には、基本業務の習得、自己効力感の獲得、集団効力感の体感の共通する3つの転換点を示した。

終章では、全体を総括した上で、本研究の成果、意義、独自性、今後の展望について触れた。

以上の通り、本研究は、保育の個別最適化の概念である「保育の個別化」と「遊びの個性化」の実態について量と質の両面からのアプローチを通して、保育所運営における保育を個別最適化する保育者の育成の重要性を明らかにしたと言える。特に、保育の個別最適化のためには保育経験が大きく影響し、一定の経験を重ねるためには保育者の成長過程で現れるれるつまづきを取り除くことが重要であることを示したと言える。

尚、本論文の各章は、以下の査読付き雑誌に公刊されている。

- 第1章 貞松成(2021). 保育士の保育経験年数の違いが3歳児の砂遊びに与える影響. 大阪総合保育大学紀要, 15, 81-94.
- 第2章 Sadamatsu, J. (2022). Experienced nursery teachers gaze longer at children during play than do novice teachers: an eye-tracking study. *Asia Pacific Educ. Rev.* <https://doi.org/10.1007/s12564-022-09818-w>
- 第3章 貞松成(2022). 保育士の子ども理解とは何か. 日本社会福祉マネジメント学会,

2(1), 3-13.

- 第4章 貞松成(2022). ビデオ・リフレクションによる子ども理解. 大阪総合保育大学紀要, 16, 134-142.
- 第5章 貞松成・中山奈保子(2023). 保育者が集団に入ることが難しいと認識する気になる子どもの範囲-発達記録を分析して-日本社会福祉マネジメント学会. 3 18-31.
- 第6章 貞松成(2023). 子どもの興味・関心の個別性に対する保育者の関わり-3 歳児の砂遊びにおける興味・関心の所在分析から-. 大阪総合保育大学紀要, 17, 121-131.
- 第7章 未発表

〔1〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、申請者は2007年より、全国に保育園を展開するA株式会社の経営者であり、保育学をより深く学ぶために本学に入学した。保育所運営における保育を個別最適化する保育者の育成の重要性を明らかにし、6編の国内、国際学会の学術誌（査読付き）に報告した。

第二の独創性については、動画解析ソフトELAN、視線計測のアイトラッキング、発達分析表の考案など、いくつかの独創的な研究手法が試されている。いずれの研究手法も保育学の分野において先行研究は乏しい。また、第5章の発達分析表については特許登録もされており、独創的であることが客観的に証明された研究と言える（特許登録番号 7179217）。

第三の研究領域における水準の引き上げについては、質的な研究が中心である保育の研究領域において、客観的なデータに基づいて科学的に実証を繰り返した本研究とその方法論は、保育学に科学的な考え方と研究方法を取り入れ、その水準の引き上げに貢献するものと評価する。

第四の学際性については、全般的に、個別最適という新しい保育の概念を示し、そのための知識や能力向上について質と量の両面からアプローチしているため、大きくは保育学と教育学にまたがった研究と言える。しかし、その他にも複数の学際性が認められる。第1、2、3、4、7章などの保育者の経験に伴う専門性の向上に焦点を当てた研究については、発達心理学や認知心理学の知見も含まれる。また、砂遊びにおける子どもの遊びの発展の違いを示した第1章と、子どもへの関わり方に焦点を当てた第6章は、授業や指導などの教育方法を研究対象とした教育方法学が該当する。さらに、発達記録を分析して、集団に入ることが難しい子どもに対する制度的な限界について提言している。第5章は、情報科学と社会福祉学も含まれている。以上のようにいくつかの学問領域が関与し、学際的な研究といえ

る。

第五の大学院が授与する博士(教育学)の学位授与については、「子どもの発達の人差」と「子どもの興味・関心の個性」の2つの観点から保育の個別最適化の構成を明らかにし、保育学に「個別最適」という新たな知見を加えた論文であり、保育学及び教育学に寄与した研究といえる。

以下に、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された意見について主なものを記載する。

本研究では、保育の個別化の構成を描くために、保育者が子どもの発達と興味・関心をどのようにとらえているのかを示した。子ども理解においては、これまでも「温かい雰囲気の中で学び合う」、「複数の保育者で捉える」、「保育者一人一人のよさが引き出される雰囲気の話し合いの中で、幼児の姿やその際の保育者の指導などについて意見を交換し、保育者同士が学び合うことを積み重ねることにより、幼児理解に繋がる」など職員会議や意見交換が子ども理解にとって重要であることは指摘されたきたが、その根拠まで示されることはなかった。しかし、本研究の1つ1つの結論が、幼稚園教育要領や保育所保育指針等が強調する子ども理解への取り組みの根拠となり、実証したことの意義は大きいだろう。

その一方で課題も残った。それは、保育者の直観の分析である。これまでの保育実践が保育者の経験と直感に頼っていた部分が大きく、科学的ではなかった。そのため、本研究では主に保育者の経験について科学的に実証してきた。たとえば、保育所保育指針では、「保育士等は子どもの表情や言動の背後にある思いや体験したことの意味、成長の姿などを的確、かつ多面的に読み取る」、「子どもの言動や表情から、その子どもが今、何を感じているのか、何を表現したいと思っているのかを受け止める」、「保育士等は、子どもの表情や仕草、体の動きから子どもの気持ちを読み取る」など子ども理解においては、子どもの顔の表情や身体の動きを重視している。子ども理解に長けた保育者であれば、子どもの顔や身体をよく見ているはずであろう。本研究では、アイトラッキングを用いて、保育者の物理的な視線の速度や保育者が子どもの活動のどこを注視しているのかなどを客観的に数量的に明らかにした。これらの研究成果は、今後の保育実践への理解、ひいては子ども理解につながると考える。また、中堅保育者の経験は、子どもの活動状況をより迅速に判断することに繋がるといふ保育実践の専門性の解明にもなる。

一方、直観も経験と同じように重要であろう。不確かなものを判断するにあたっては直観が頼りであるともいえる。特に、保育者によって見解が異なる子どもの内面などは不確かなものであり、保育者も経験に基づいた直観によって判断していたであろう。こうした直観を科学的に実証することは経験と同じように意義のある課題といえる。

今後の課題として2点あげられる。第一点は、個別最適な学びは協働的な学びと一体的に

考えられるものである。2つの学びを一体的に充実させることで、主体的・対話的で深い学びの実現が可能であり、協働的な学びの研究も必要である。二点目は、今後、個別最適化された保育がどのように子どもの利益となってあらわれるについて明らかにするために、個別最適な保育実践された群とされない群を追跡したコホート研究も必要であろう。

以上、本論文において得られた知見は、保育実践に資する可能性が大で、今後の研究の発展が期待され、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと論文審査委員全員一致で判断した。